

共通

全般	計画	土づくり	苗づくり	植付け	初期	中期	後期	収穫	調製	出荷

環境負荷の低減対策

規範項目 18

必須・重要・推奨

安

環

気象や生育状況を踏まえた適正な追肥

施肥は、作物の収量や品質を向上するために重要な技術ですが、過剰に施用した場合、環境や品質に悪影響を及ぼす恐れがあります。

このため、生育診断結果や気象条件等を勘案した、効果的・効率的な追肥を行うことが必要です。

取組事項

- ・ 地域の土壌条件に応じた施肥基準に則し、ほ場ごとの追肥の施肥設計を作成する。
- ・ 生育診断の結果や気象条件等を勘案した効果的・効率的な追肥を施用する。

農作物は、施用された肥料成分のすべてを利用することはできず、肥料成分の一部は環境中に溶脱、流亡または揮散します。

このため、肥料の過剰な施用は、倒伏による収量・品質の低下だけでなく、環境負荷やコストの増加を招く恐れがあります。

一方、水稻では、近年の登熟期間が高温で推移する中、腐植の少ない砂質乾田や洪積赤土のほ場で栄養凋落(草色の急激な低下)による品質低下が見られるなど、適期・適切な追肥が求められています。

このことから、肥料の施用に当たっては、地域の土壌条件に応じた作物ごとの施肥基準に則した施肥設計を作成し、実施しましょう。

【生育診断や気象条件に応じた適正な追肥】

高品質な農産物の生産のため、生育診断の結果や気象条件に応じた、きめ細かな追肥を実施しましょう。

【肥効調節型肥料の利用】

肥効調節型肥料(被覆肥料、化学合成緩効性肥料及び硝酸化成抑制剤入り肥料)は、作物の肥料吸収特性を踏まえた施肥方法を採用することによって、肥料成分の環境中への溶脱、流亡をさらに低い水準に抑えることができます。

特に水稻において、速効性肥料と肥効調節型肥料を配合した肥効調節型穂肥肥料については、穂肥を一回で施用できるなど省力的であること、砂質浅耕田など地力の低いほ場においては、肥料の利用効率が高く効果的な施肥が期待できます。

なお、通常の施肥に比べて、肥料費や施用のための機械装備に追加の経費が必要となる場合が多いことから、経営の状況を考慮し、適切な利用に努めましょう。

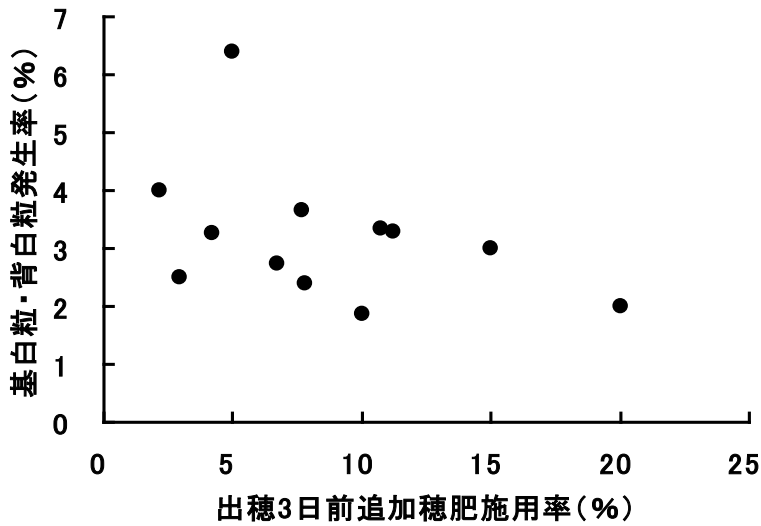


図1 高温条件下における追加穂肥と品質の関係 (H22 富山農振セ)



図2 基白粒



図3 背白粒

■ 生育診断結果に基づく穂肥施用の例

5月中旬植えのコシヒカリの場合、下表を参考にしながら、幼穂形成期の生育が目標を超えている場合は、施肥時期を遅らせるか、減肥して、過剰生育や倒伏を防ぐ。

表 5月中旬植えコシヒカリの生育目標

	幼穂形成期 (出穂23日前)	幼穂長15mmの時期 (出穂15日前)
草丈	72cm	82cm
茎数	470(本/m ²)	430(本/m ²)
葉色	3.8	3.6

生育診断結果や施肥基準を有効に活用するため、最寄りの農業協同組合や農林振興センター等の指導機関からアドバイスを受けましょう。

【根拠法令等】

- 地力増進法・地力増進基本指針（平成20年度農林水産省公表）
- 環境と調和のとれた農業生産活動規範について（平成16年度農林水産省通知）